

大陸文化との交渉接觸がはじまつたのであります。そこで従來徐々に發達したわが國の文化は、その影響によつて飛躍的に進歩して、いわゆる飛鳥時代の文化を現出するに至つたのであります。

一度隋との直接の交渉が起りましたから、その氣運は引續き愈々盛んになつてまいりまして、翌年の推古天皇の十六年にはまた妹子が隋に使し、その歸る時には、裴世清が隋からの使として同伴して日本にやつてまいりました。その後、日本から使を出せば、隋からも使を送るということを繰りかえし、兩者の間の國交は、極めてなごやかに行われてきました。ところがその後十年ばかりして、六一八年に隋が亡び唐が興りましたので、日本では、隋との國際關係をそのまま唐に及ぼし、遣唐使とか、留學生とかいうものを出して、唐の文化の導入に努めたのであります。

つづいて奈良朝に入りますが、この奈良朝でもつとも盛んな時であつた聖武天皇の天平の御代は、唐においても最も華やかな玄宗皇帝の時代に當つております。かく隋・唐時代の絢爛たる文化が、飛鳥奈良の兩時代を通じて、滔々として日本の國に流入し、日本の文化開發の役を果してくれたので、日本文化は従前に較べて飛躍的に進歩し、劃期的な發達を遂げたのであります。この経過から考えてみましても、ある民族の文化の發達は、その階梯として異民族の文化との接觸に俟つという鐵則は、みごとに證明されたものと認められるのであります。

然し、廣く世界の歴史を考えてみますと、ある民族が異種類の文化を受容れるには、その受容れ方に、いろいろな相異があつて、必ずしも同一ではないのであります。或は他の文化を全面的に受容れたと認められるものもあれば、或は部分的に取りいれて、自己の固有文化の發展に資したと認められるものもあります。これは要するに、彼